



## 講演Ⅱ 「国際失語連合 第1回イギリス大会に参加して」

吉野眞理子氏 (言語聴覚士 筑波大学人間系教授)

今年3月5日・6日の2日間、イギリスのバーミンガム近郊、Warwick大学において、国際失語連合 (Aphasia United) の第1回大会が開催されました。国際失語連合とは、失語のある人々、失語の研究者、失語の臨床家それぞれの団体を結びつける国際的団体で、2012年に設立されました。初めての大会には、開催国イギリスを始めオーストラリア、ニュージーランド、ハンガリー、スロベニアなどから、65名の失語のある人々、23名の介助者、21名の専門家、16名の学生が参加しました。日本からは私を含め4名の言語聴覚士が参加しました。大会プログラムは、失語のある人々の体験談、活動やグループの紹介、失語への認識を広めるための取り組み、機器やネットを活用したセラピー、芸術活動、研究、話し合いなど多彩なものでした。なにより積極的で生き生きとした失語のある人々が印象的でした。この様子をご報告したいと思います。



## 講演Ⅲ 「今日も元気か、笑顔はあるか」

大田仁史氏 (医師 茨城県立健康プラザ管理者/茨城県立医療大学付属病院名誉院長)

これは天才ST遠藤尚志さんの言葉です。失語症者の在宅ケアがうまくいっているかを遠藤さんは①今日も元気か、②その人は笑うか、③考えの範囲は広がっているか、④ほんとうに何も話せないのか、⑤言語障害の区分けの5つの項目でチェックしていたそうです。

たしかに言葉が不自由でも活動的で周囲に笑いの花びらをまき散らす人がおられます。そのような人は失語症者の集いでも人気者ですし、周りの人を元気にしてくれます。

一人で笑う人はいませんし、元気な人でないと心から笑うことはできないでしょう。失語症の人に限らないのですが、障害をおった人たちは絶対仲間が必要です。仲間といることで孤独感から解放されることもあるし、将来への関心が湧いてくることもあります。共に支え、支え合い、笑いの飛び交う仲間がいる場所を増やしましょう。その輪を広げていきましょう。

## 市民公開シンポジウム「これからの失語症のある人のための地域支援を考える」

医療から介護への移行が急速に進み、これまで以上に生活期リハビリのあり方を考えなければならなくなりました。失語症のある人たちや家族は地域でどんな問題を抱えているのか、また地域包括ケアの時代の今日、失語症のある人をどう支援すればよいのか、当事者、家族、地域活動を実践している言語聴覚士等のシンポジストとともに、これからの失語症のある人の地域支援について考えていきたいと思えます。



黒澤武史氏

### 「当事者の立場から」

失語症当事者/若い失語症者のつどい  
初代会長



中村太一氏

### 「大分でSTが始めた失語症デイ」

言語聴覚士/コミュニケーションデイ  
サービス言の葉代表



岡田理砂子氏

### 「家族の立場から」

失語症者家族/青森失語症友の会「ちよちゃべの会」代表



宇野園子氏

### 「失語症者向け意思疎通支援者養成事業と和音の活動」

言語聴覚士/NPO法人言語障害者の社会参加を支援するパートナーの会和音代表



田中加代子氏

### 「失語症者家族が始めた失語症者のための地域活動支援センター」

失語症者家族/地域活動支援センター  
トークゆうゆう代表



黒羽真美氏

### 「これからの地域言語聴覚療法」

言語聴覚士/日本言語聴覚士協会理事  
介護老人保健施設マロニエ苑

(いわて保健福祉基金助成事業)